

「欲望のバージニア (LAWLESS)」

★★★★

2013 (平成25) 年5月15日鑑

賞<GAGA試写室>

監督: ジョン・ヒルコート

脚本・音楽: ニック・ケイヴ

原作: マット・ボンデュラント『欲望のバージニア』(集英社文庫刊)

ジャック・ボンデュラント(ボンデュラント兄弟の三男) / シャイア・ラブーフ

フォレスト・ボンデュラント(ボンデュラント兄弟の次男) / トム・ハーディ

ハワード・ボンデュラント(ボンデュラント兄弟の長男) / ジェイソン・クラーク

マギー・ポーフォード(シカゴから来た女性、フォレストの恋人) / ジェシカ・チャステイン

パーサ・ミニクス(牧師の娘、ジャックの恋人) / ミア・ワシコウスカ

チャーリー・レイクス(特別取締官) / ガイ・ピアース

フロイド・バナー(シカゴのギャングのボス) / ゲイリー・オールドマン

クリケット(ジャックの親友) / デイン・デハーン

ガミー・ウォルシュ / ノア・テイラー

アブシャイア / リュー・テンブル

2012年・アメリカ映画・116分

配給/ギャガ

<禁酒法時代を描いた映画は名作揃い！>

アメリカには1919年から1933年まで「禁酒法時代」という何とも奇妙な時代があったが、禁酒法が「天下の悪法」であったことは今や公知の事実。禁酒法は消費のための酒類の製造、販売、輸送、輸出入を禁止する法律だが、飲酒自体は禁じていなかったというから、それ自体が奇妙だ。同法は1920年1月16日にアメリカ合衆国憲法修正第18条下において施行されたが、禁酒法の廃止を謳ったルーズベルトが大統領に就任した後1933年に廃止された。もっとも、1920年代という世界恐慌の時代にこんな法律が施行されたことによって、逆に密造酒が出回るとともに、①密造酒、②売春、③賭博を三大ビジネスとする「ギャング」がのさばることになったから皮肉なものだ。そして、国民はこれによって酒すら自由に飲めなくなったうえ、ギャング支配を黙認しなければならなくなったから、まさに暗黒の禁酒法時代だ。

もっとも、1918年に第一次世界大戦が終了しアメリカの繁栄が始まろうとしていた矢先にそんな「激動の時代」を迎えたため、「禁酒法」時代はアメリカ映画の絶好のネタとされた。ギャングと禁酒法時代を描いた映画の代表は、シカゴを舞台に連邦捜査官とアル・カポネとの戦いを描いた『アンタッチャブル』(87年)だろうが、近時の『ロード・トゥ・パーディション』(02年)(『シネマルーム2』143頁参照)や『パブリック・エネミーズ』(09年)(『シネマルーム24』186頁参照)もその系列の面白い映画だった。『ゴッドファーザー』3部作(72年、74年、90年)もこれに含めて考えれば、まさに禁酒法時代を描いた映画は名作揃い！すると『The Wettest County in the World』(邦題『欲望のバージニア』)を原作とした本作も、きっと面白い！

<なぜ製造酒業者がヒーローに？なぜ取締官が悪人に？>

禁酒法時代の真ただ中であっても、アメリカ大陸東部のバージニア州フランクリン郡の丘陵地帯は、無数にある違法の蒸留酒製造所の光でオレンジ色に輝いていたらしい。本作冒頭に紹介される、「不死身」を売り物にする長男ハワード・ボンデュラント(ジェイソン・クラーク)、次男フォレスト・ボンデュラント(トム・ハーディ)とその弟ジャック・ボンデュラント(シャイア・ラブーフ)の三兄弟、そしてジャックの親友であるクリケット(デイン・デハーン)たちが山の中に潜んで密造酒ビジネスに精を出している姿は興味深い。彼らがつくるのは蒸留酒で、その材料はカブ、カボチャ、トウモロコシ粉、木の皮等々何でもござれだが、さてその味は？

映画冒頭、運転手役の三男ジャックのナレーションによって、なぜ長男と次男が不死身と言われるようになったのか、また新商品の開発に熱心なクリケットの協力を得た三兄弟の密造酒ビジネスがなぜ順調なのか語られる。しかし、そもそも彼らは法律違反のビジネスで食っているわけだから、悪い奴のはず！それなのに、本作ではなぜ彼らはヒーローに？逆に、シカゴからバージニアに赴任してきた新任の特別取締官チャーリー・レイクス(ガイ・ピアース)は法の番人で正義を代表しているはず。それなのに、本作ではなぜレイクスは悪人に？

<なぜ原題の『LAWLESS』を生かさないの？>

官と民の役割分担とその共働が大切なことは言うまでもないが、実際は逆に悪徳役人と悪徳商人が賄賂で結ばれるケースが多いことは古今東西を問わず世の常だ。アメリカの禁酒法が歴史的な「悪法」と言われる所以は、まさに禁酒法を契機として生まれた密造酒ビジネスをめぐる取締官と密造酒業者が賄賂で結ばれたこと。そしてまた、密造酒の利権をめぐる縄張り争いのためギャングの台頭を招いたことだ。本作冒頭に描かれる、次男フォレストを中心とした三兄弟の密造酒ビジネスは堅実そうだが、いつどこにどんな危険が潜んでいるかは誰にもわからない。ちなみに、ジャックの目の前で展開される、シカゴのギャングのボスであるフロイド・バナー(ゲイリー・オールドマン)によるマシンガンの乱射風景を見ていると、ギャングたちの縄張り争いの恐ろしさがよくわかる。

そんな古き良き時代(?)の楽しそうな雰囲気(?)が一変するのは、バージニア州に新たに赴任してきた特別取締官のレイクスが密造酒業者に対して高額の賄賂を要求し、それに逆らうものは容赦しないという姿勢を鮮明にしてきた時。多くの密造酒業者たちは「長いものには巻かれる」式に流れたが、「不死身伝説」を誇るハワードとフォレストはそれを断固拒否。そこから本作のテーマとなる「三兄弟VSレイクスの対決」が始まるが、そんな本作の邦題がなぜ『欲望のバージニア』なの？たしかに本作の舞台はバージニアだが、この邦題では本作がそんなテーマの映画だということは全くイメージできない。それに対して、本作の原題は『LAWLESS』。本作がアメリカの禁酒法時代を描く映画であり、もともと無法モノの密造酒業者と「法の番人」でありながらその権力を利用して無法モノ以上の悪役となっているレイクスとの対決をテーマとした映画なら、やはり『LAWLESS』という原題を生かした方が良かったのでは・・・。

<好対照の2人の女にも注目！>

韓国のパク・チャヌクがハリウッドに進出して監督した『イノセント・ガーデン』(12年)は面白かったが、意味シンなところが多く、その理解(解釈)には骨が折れた。それに対して本作は、悪役のレイクスはもちろん三兄弟のキャラは濃く、その人物像がハッキリしているから、良くも悪くもわかりやすい。そしてそれは本作に登場する2人の女も同じだ。まずわかりやすいのは、ジャックが惚れ込む牧師の娘パーサ・ミニクス(ミア・ワシコウスカ)。こちらは厳格な父の下に育っただけにいかにも身持ちが固そうだが、それでもやっぱり女。ジャックがあくまで一直線にパーサを口説き続けていると、いつしか・・・。

そんな「純愛」に対して、互いに大人のくせにフォレストとの間のセックスレス関係が長く続く(?)、何とも微妙な男女関係(恋人関係)を見せるのが、田舎で静かな暮らしをしたいとシカゴからバージニアにやってきた都会の女マギーだ。マギーを演ずる女優はどこかで見た顔だと思いつながらなかなか思い出せなかったが、何と彼女は『ゼロ・ダーク・サーティ』(12年)でCIAの情報分析官マヤ役を演じたジェシカ・チャステインだった。ぶっきらぼうで女に対する愛の告白など全く似合わないフォレストと、レイクスから「お前のような売春婦に誰が手を出すか！」とまで言われてしまった都会の酒場で汚された女のマギーが織り成す大人の恋愛は、実に味わい深い。それにしても、ジェシカ・チャステインのような女優が自ら服を脱ぎ、「いつまでも女を待たせるものではないわ」と迫られたら、男は・・・？

<クライマックスに見る「不死身伝説」をタップリと！>

密造酒づくりにはそれなりの規模の設備が必要なうえ、販路がキープされていなければ商売が成り立たないから、特別取締官の権限をもってすればその発見と摘発は簡単。しかも、ボンデュラント三兄弟の反レイクス路線に従わない多くの密造酒業者たちがいるのだから、「タレコミ」の懸賞金でもかければそれはすぐに可能なのでは？本作を観ていてずっとそう不思議に思うのだが、ジャックもクリケットもレイクスによって痛めつけられたり、フォレスト自身も暴漢によってナイフで喉を掻っ切られたりと大変な目に遭い続けながら、ボンデュラント三兄弟は密造酒事業をずっと維持し続けていく。そこらあたりの密造酒業者と取締官との力関係や捜査の仕組みがわからないのが本作の欠点(?)だが、映画づくりの手法としてはこれがラストに向けた対決を盛り上げていくことになるから、まあいいか・・・。

ボンデュラント三兄弟のアジトがレイクスたちに発見されてしまうのは、ジャックがフロイドとのある取引にたまたま成功し大金を手に入れたことによって、パーサに対して「ええカッコ」をしたため。そりゃ、高級スーツを身にまとい、ド派手な車に乗って若い女の子を連れ回せば取締官の目につくのは当然だ。我慢に我慢を重ねたボンデュラント三兄弟が、ついに権力を行使してきた悪徳取締官レイクスに対して決死の対決を！こりゃまるで、かつての鶴田浩二や高倉健の東映ヤクザ映画と全く同じ構図だが、そうとわかっていても本作のクライマックスとなる境界線の橋の上での銃撃戦は見ごたえがある。それにしても、拳銃ってこんなに当たらないもの？また、当たってもなかなか死なないもの？まさに、東映時代劇の壮絶な斬り合いを彷彿させる、クライマックスの銃撃戦を楽しみたい。さらに、ストーリー最終後の「おまけ」として見せてもらうことになる、ボンデュラント三兄弟とりわけ次男フォレストの「不死身伝説」をしっかり記憶に留めたい。

2013 (平

成25) 年5月17日記